

きく ち かず ひろ
菊 地 和 博

学位の種類 博士(文学)
学位記番号 文 第 249 号
学位授与年月日 平成20年11月13日
学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当

学位論文題目 シシ踊り鎮魂供養の研究

論文審査委員 (主査)

教授 鈴木 岩 弓 教授 嶋 陸奥彦
准教授 木 村 敏 明

論文内容の要旨

目次

序章

| | |
|-----------------|-----|
| はじめに | 1 |
| 一、本研究のねらい | 1 |
| 二、本論の進め方および構成 | 2 |
| 第一章 シシ踊り研究史の概括 | 3 |
| 一、シシ踊り研究史 | 3 |
| 二、シシ踊り研究史の整理と課題 | 15 |
| 第二章 東北地方のシシ踊り | 16 |
| 一、青森県のシシ踊り | 17 |
| 二、秋田県のシシ踊り | 24 |
| 三、岩手県のシシ踊り | 45 |
| 四、宮城県のシシ踊り | 82 |
| 五、山形県のシシ踊り | 88 |
| 六、福島県のシシ踊り | 108 |
| 第三章 関東地方のシシ踊り | 122 |
| 一、栃木県のシシ踊り | 123 |
| 二、茨城県のシシ踊り | 126 |
| 三、埼玉県のシシ踊り | 127 |

| | |
|--------------------------|-----|
| 四、その他のシシ踊り | 132 |
| 第四章 新潟県のシシ踊り | 134 |
| 第五章 移動した例外的シシ踊り | 140 |
| 一、福井県小浜市の雲浜獅子 | 140 |
| 二、愛媛県宇和島地方のシシ踊り | 143 |
| 第六章 東北地方のシシ踊りの特質—供養性と野獣性 | 150 |
| 一、鎮魂供養の実態 | 151 |
| 二、シシ踊り鎮魂供養の考察の意義 | 154 |
| 三、餓鬼仏・無縁仏供養とは | 155 |
| 四、餓鬼仏・無縁仏供養の現状 | 156 |
| 五、餓鬼仏・無縁仏供養の場所性 | 159 |
| 六、異界から来訪するシシ | 161 |
| 七、演目「雌ジシ隠し」の解釈 | 162 |
| 八、鹿踊供養碑と南無阿弥陀仏 | 163 |
| 九、シシの野獣性 | 164 |
| 第七章 全体的考察と問題提起 | 172 |
| 一、シシ踊りの根元 | 172 |
| 二、シシ踊り成立要因 | 177 |
| 三、類型化とシシ踊り文化圏 | 189 |
| 四、飢饉の風土とシシ踊り | 203 |
| 五、問題提起と今後の検討課題 | 209 |
| (1) シシ踊り成立時期の再検討 | 209 |
| (2) 三頭から多頭への変化説の再検討 | 213 |
| (3) 「鹿踊り」＝踊り念仏説の再検討 | 215 |
| (4) 仙台鹿踊りから八ツ鹿踊り説の再検討 | 218 |
| (5) 羯鼓踊・太鼓踊からシシ踊り説の再検討 | 218 |
| 終章 まとめ | 219 |
| おわりに | 221 |

はじめに

シシ踊りは、鹿や猪などの野生動物に扮するカシラを身につけて踊る民俗芸能であり、例外をのぞき東日本にしか分布していない。これはじつに不思議な文化現象である。さらに、東日本のなかでも関東地方を中心に三頭のシシ踊りが多数を占めるが、東北地方では多頭のシシ踊りが非常に多い。踊りの役割や目的も関東地方と東北地方ではかなり異なっていることが知られる。

そもそもシシ踊りがなぜ日本列島に偏在しているのかも含めて、この庶民芸能には未解明の部分が少なくない。とりわけ東北地方のシシ踊りについてはそうである。本研究では東北地方のシシ踊りの鎮魂供養の側面に焦点を当てながら、この芸能の東北的特質を浮き彫りにしつつこれまでのシシ踊り研究から一歩前進する試みをしてみたい。

本研究では獅子踊りを「シシ踊り」と表記して「獅子」の文字を用いない。それは、大陸伝来の獅子舞とシシ踊りは本来異なる芸能であるとの立場を鮮明にする意図がある。獅子はライオン、シシは猪や

鹿など日本列島に棲息する野生動物として区別していきたい。

1、シシ踊り研究史の整理と課題

- (1) 現在では獅子舞とシシ踊りは歴史、芸態、目的等から別個の芸能であるとの認識が多数である。獅子舞は大陸から伝来して定着したものであるが、シシ踊りは日本固有の風流芸能の一つと考えられている。「二人立ち獅子舞」と「一人立ち獅子舞」という表現で大別する場合がある。しかし、かつて鹿や猪の肉をシシとって音を同じくしたことから、今なお外来の「獅子」と同じ名称を用いる傾向が依然としてあり、それがいくらかの混乱を招いている。
- (2) シシ踊りは、西日本に伝承される太鼓踊りと同じ風流踊りの一つであり、特化された獅子の扮装以外に大きな相違はないという見解が一般的である。特に「三匹獅子舞」は、西日本の羯鼓踊り・太鼓踊りの中踊りが独立して成立したという見方が強い。四隅に立つ花笠姿のササラ摺りは、太鼓踊りの側踊りが付随してできたというのである。江戸時代初期の幕府成立頃に三匹獅子舞が関東地方に出現し、次第に東北地方の多頭のシシ踊りへと展開したとみられている。
- (3) なかには東北地方のシシ踊り（鹿踊り）の歌と踊りは古いという見解もみられ、従来のシシ踊り成立論や伝播論に問題を投げかけている。同じように、シシ踊りが西日本の太鼓踊りの中踊りが独立して成立したという見方がすべてにはあてはまらないのではないかとの異論も出されている。今後大いに検討すべき余地が残されている。
- (4) シシ踊りは、鹿・猪・龍・羚羊などを模したカシラを被る風流芸能の一つである。風流芸能は疫神の鎮送や雨乞い、先祖供養や五穀豊穰、さらには祟りをなす悪霊を鎮め送るために踊られる場合が多い。シシ踊りもそれら風流芸能のさまざまなバリエーションの一つであり、共通の源流から生まれて地域的展開をとげた庶民芸能であるという。
- (5) 一方では東日本のシシ踊りの成立背景には、狩猟の対象となった猪や鹿などの動物への感謝や霊を慰める心情がはたらいていると考えるべきだとの意見がある。そこには、庶民芸能が成立する歴史風土的背景や地域的事情を考慮すべきだとの見解がうかがわれる。すべてが畿内の中央から地方へと伝播したとする一元的流れで捉えられるほど文化は単純なものではないという見方も当然のことであろう。
- (6) 『万葉集』巻十六の「乞食者詠二首」にみられるように、古くから鹿は害獣であり服従の踊りや降伏の舞いがあった。それが現在の東北の「鹿踊り」になんらかのかたちで結びついており、豊作をもたらす予祝芸能として行なわれてきたという。シシ踊りの背景には害獣観も色濃くあるとの見解も重視しなければならないだろう。
- (7) 青森県黒石市のシシヶ沢のシシ頭彫刻や各地に残る「獅子塚」などは、鹿のカシラを神に祭ることが行なわれていたか、あるいは鹿供養を行なった、などの見解が示されており、鹿踊り（シシ踊り）の始源・本質がそこに表れているという捉え方がみられる。特に柳田は、獅子舞の伝播以前にすでにカノシシ（鹿）の頭を祭に仕へる習はしを持っていたと捉え、東北地方の「鹿踊り」は鹿のカシラを神に捧げる祭りごとのなかで成立したと述べている。これは動物のカシラ儀礼や頭骨信仰にもつながる見方であり、シシ踊りの解明に示唆をあたえるものである。
- (8) 鹿のカシラは、いつの頃から唐獅子風の権現型に変化して、東北の鹿踊りは鹿であるとともに超動物的な精霊という二重性格をもつようになったという見解がある。これは、外来の獅子舞（権現舞）と東北のシシ踊りが歴史的にどのような交わりがあったのかを考え、またシシ踊りのもつ性格を知るうえできわめて貴重な見解である。
- (9) 旧仙台領に分布する鹿踊り（ハツ鹿踊り）は、伝書から江戸期直前に「仙台鹿踊」が伝播して生ま

れたとされている。東北地方のシシ踊りの象徴のように考えられている鹿踊りだけに、この両者の関係は明確にする必要がある。この問題については「仙台鹿踊」の発生時期と史実とを照らし合わせて厳密に検討する必要があるだろう。

- (10) 獅子舞が御霊を鎮める役目を担ったことが明らかにされ、後世に遊行門派の念仏聖で獅子を被って念仏踊をする者があったことから念仏系獅子舞が存在したとされる。そこでシシ踊りもこの念仏系芸能であるとする。さらに、シシ踊りがいっそう念仏的であるのは、特に東北地方では踊り念仏を伝えた空也上人の影響が強いからであり、東北の鹿踊りは空也僧の伝播によるものだろうという。そして関東の三匹獅子舞も、唱える歌が和讃調であることから念仏からの転化であろうとされる。
- (11) はたしてシシ踊りを右のようにとらえることが妥当であるかどうか。特に東北に関する論は、空也系の踊り念仏の影響の強さが全面に突出している印象がある。これについては、地域の史実や伝承を含めた実地踏査に基づく検証が必要である。この問題についても、東北の固有性や個性的展開の有無を念頭においた分析・検討が進められるべきであろう。
- (12) シシは山から里へと時を定めて降りて来る訪れ神である。精霊であるシシは、特に盆の時期に山から里に来てホトケのため供養し、またホトケの往来を邪魔するものを遠ざける「神秘の来訪者」であるとする。一方では死を悼んで彼岸往生を受けとめる山の神であるという捉え方もある。村里の人々の抱く民間信仰としてシシの二重性や複合性がそこにみられるが、シシ踊りの地域的役割の一断面としてありうるだろうと考えられる。
- (13) 確かに日本人の霊魂観からすれば、祖霊が来訪する神となって家々を訪れるということが期待され、シシは祖霊という役割をも担ってきた側面も否定できない。しかし、シシの本来の役割は、右の述べられているように「ホトケの往来を邪魔するものを遠ざける」ためだろうと考えられる。このあたりの究明が本研究の大きな課題となる。

2、本研究のねらい

これまで関東地方に多く伝承される三頭シシ踊り（三匹獅子舞）の実態や成り立ち・系譜は、西日本の風流踊り・太鼓踊りと関連づけられてかなり明らかにされてきた。それと比較すれば、東北地方に伝承されるシシ踊りの研究は、いまだ総体的に取り組まれてはいないのが現状である。したがって、本研究のねらいは次のようなものである。

第一に、東北地方六県のシシ踊りの全体像をつかむことをめざす。これまでは各県単位や小地域単位でしか実態はつかめなかった。全体像をとおして、各県の枠を超えた東北のシシ踊りの共通性や相違点、特徴点などを検討するための基本的研究内容としたい。

第二に、東北地方のみに五頭、七頭、十二頭などの多頭シシ踊りが多数分布していること自体が謎めいていて、興味深い民俗事象である。関東地方に集中する三頭シシ踊り（三匹獅子舞）とは発生を異にすることもありうるとの問題意識を背景に、庶民芸能を東北の歴史風土や社会史と重ね合わせて究明する。

第三に、東北地方のシシ踊りの役割として最も特徴をなすものは鎮魂供養であることを明らかにする。

それは主として餓鬼仏・無縁仏などの邪霊の鎮魂、すなわち怨霊を鎮め払う伝統的なタマシズメである。そして、シシ踊りとは集落に災厄がもたらされないよう願いを込めて演じられた共同体の芸能である。これらのことを地域的事例を積み重ねるなかから提示する。

第四に、東北地方のシシ踊りが餓鬼仏・無縁仏などの邪霊を鎮送する強い呪力を発揮できるようになるのは何故なのかを明らかにする。そのためには東北において獅子舞（権現舞）を奉じた修験山伏の存在に焦点を当て、シシ踊り儀礼である「精入れ」「精戻し」などに修験山伏が関与した可能性を検討し

てみる。そのことをつうじて、中世の村落社会が邪霊鎮定の芸能を欲し、それをシシおよび修験山伏に求めた背景を探る。

第五に、東北地方の山と動物と人々の暮らしを歴史的に関連させる視点に立ち、シシ踊りのもつ野獣性について、外見や風貌はもとより、「鉄砲踊り」や「案山子踊り」「山越え」「山掛け」「太刀使い」などの演目をつうじて明らかにしたい。言い換えれば、シシ踊りから東北地方における人と野獣とのかかわりの深い歴史性を考えてみる。

第六に、東北六県のシシ踊りをすべて一様に論ずることは無謀である。また各県単位にくくれるものでもない。そこで地域的歴史実態に即してある程度の類型化をはかりながら、県域を越えたいくつかのシシ踊り文化圏の設定を試みる。そうしてこそ風土性や歴史性を背負った東北の多様なシシ踊りが姿を現す。逆に、シシ踊り文化圏をつうじて東北地方の歴史文化が一定程度俯瞰できることをめざす。

第七に、特に江戸時代に入ると冷害による凶作・飢饉が東北地方に多発し、餓死者・疫死者の数は数十万に及ぶ惨状を呈した。犠牲者の怨霊の不安という点において、シシ踊りの本来を役割である餓鬼仏・無縁仏供養の必要性がいつそう強まったことが想定される。シシ踊りを飢饉の歴史風土に重ね合わせて、その本質と役割をいつそう明確にする。

第八に、シシ踊りの成立年代や伝播のありかた、多頭シシ踊りの先行土着の問題など、全般にわたってシシ踊りの通説に対する問題提起を行い、再検証のなかから新たな論や見方を提示する。

第九に、本研究がシシ踊りという芸能を手がかりに、列島における地域の固有性や主体性を意識した地域文化論構築に向けた試論となることを目指す。

おおよそ以上のことをねらいとしたが、その達成には次のことを念頭においた。一つは、東北地方のシシ踊りの実像を描き出すには、関東地方の三頭シシ踊（三匹獅子舞）との比較検討が必要とされる。両者の同一性と差異は何かを問い続ける立場を意識し続ける。

もう一つは、筆者の問題意識として、西日本の風流太鼓踊りを源流として関東地方の三頭シシ踊り（三匹獅子舞）が生まれ、それが東北地方のシシ踊りへと伝播・発展したという、西から東への文化の一元的見方の問い直しがある。東北の磁場から、列島の文化に多元的見方が加えられるべきであるという考えをもとに考察を進めていく。

最後に述べておくが、本研究は東北地方のシシ踊りを手がかりに、西日本の風流踊りと関東地方の三頭シシ踊り（三匹獅子舞）との関連、ひいては東日本全体のシシ踊りの解明を目指したものではない。それはじつに重要な課題であり本文でもいくつかそれについての見解は述べている。しかし、本研究はそれを直接的に論ずることがねらいではなく、いうなればシシ踊りの「東北的個性」の解明に力点をおいている。

3、本論の進め方および構成

本論は序章から終章までの九章構成とする。これまで述べた本研究のねらいを達成するための論述内容を簡潔に述べてみる。

第一章では、これまでのシシ踊り研究の歩みを概括する。はじめに、資料や絵画のなかでは獅子舞とシシ踊りはどのように扱われてきたのか、二人立ちの獅子舞と一人立ちのシシ踊りの変遷過程を確認する。それから、二十人近い研究者のシシ踊りについての見解の要点をとりあげ、今後に向けた課題や問題点となるべき部分を整理してみる。このことが本研究の考察の基点ともなるはずである。

第二章では、東北地方六県に継承されるシシ踊りの実態と特徴点を把握する。本論の根幹をなすいわば基本資料であり、それが後段の類型化とシシ踊り文化圏設定のための基礎となる重要な考察である。

第三章では、関東地方のシシ踊りについて大まかに県単位でみていく。石原ささら獅子舞の分析・検討をとおして関東系三頭シシ踊り（三匹獅子舞）の特色をつかむことに主眼をおきながら、東北地方のシシ踊りとの大いなる相違点を浮かび上がらせようとするものである。

第四章では、新潟県北部地域のシシ踊りをとりあげる。地理的位置や文化・産業的交流では東北地方と密接な関係にある新潟県と東北のシシ踊りに類似性はないのか、相違点は何かを考察する。ここでは特に踊り納めに行われるシシのカシラのマクガリ儀礼に注目し、東北地方六県の同様なカシラ儀礼との相互関連性を検討する。

第五章では、江戸時代に藩主の移動にともなって移された福井県小浜市の雲浜獅子と愛媛県宇和島地方に継承されるシシ踊りの現状をみていく。移動前と移動後では芸能内容にどのような影響があるのかの視点で考察し、それをとおして歴史風土のなかの文化の変容を考えてみる。特に宇和島地方のシシのカシラ・芸態などをつうじて東北地方との比較文化が可能である。

他方、茨城から秋田へ移動したささら、会津へ移動した彼岸獅子なども比較考察の対象とする。これらの移動したシシ踊りに死者供養があるやなしやという視点からの実態把握は本研究にとっても必要不可欠である。

第六章では、それまで各県や地方単位でみてきたシシ踊りの全体像を踏まえて東北地方のシシ踊りを分析し、歴史風土とからめた鎮魂供養やシシの野獣性という特質を明らかにする。それはおのずから関東地方の三頭シシ踊りとの違いを浮かび上がらせようとするものでもある。

第七章では、さらに五点にわたって全体的考察と問題提起を行う。東北地方のシシ踊りの根元として、聖獣観や害獣観がない交ぜになっている民俗心意を背景に据えた考察を試みる。また、シシ踊りが成立する要因として、獅子舞（権現舞）を奉じた山伏修験の関与が考えられる。それはシシ踊りの始まりや終わりの厳粛な儀礼とカシラの権現化の発想から想定されることである。一方では、地域の歴史文化の実態に即したシシ踊りの類型化とシシ踊りの文化圏を九つにわたって設定して、その実態や特徴を論じる。

一方、シシ踊りの鎮魂供養は、特に江戸時代に入ってから数十万人にのぼる凶作・飢饉による餓死者や疫病死者に対するものではなかったということを、各種史料等のこれまでの研究成果を踏まえて検討する。さらに、これまでのシシ踊りの成立時期や多頭シシ踊りの土着性などに関するいくつかの見方・考え方に対する問題提起と検証を行い、今後の究明すべき課題や新たな論を展開する。

終章は、結語としてまさに本研究の最終的な結論を述べるものである。

4、本研究の概要とまとめ

- (1) 東北地方のシシ踊りの最大の特色は、お盆の時期に墓地内で供養の踊りを行なうことだといえる。特に東北地方北部の青森県・秋田県・岩手県では多くの事例がみられる。東北北部以外では、現在ではすでに墓踊りがなくても、家々を訪れて死者の遺影や位牌を前に踊る場合が多いのが実態である。
- (2) 日本列島を見渡せば、お盆に死者供養のために踊る芸能は数多い。しかし、東北地方のように鹿や猪などの野獣に扮して死者供養を行なうのは例外的である。それはいったい何故なのか。死者供養とはいえ誰を供養するために踊るのか。その本来の役割とは何だったのか。本研究は主としてこのことを追い求めてきたのである。
- (3) この結果、シシ踊りの役割の第一義性としては、餓鬼仏・無縁仏などの邪霊に対する鎮魂供養であることを明らかにした。むろん二義的役割としての新仏供養や先祖供養も行なわれている地域が少なくないのが実態である。日本人の怨霊観念は、長い歴史をかいくぐってじつに連綿と継承されてきたといえる。恨みを残したりこの世に執着を持った死霊は、ときとして平穏な暮らしを乱し凶作・飢

- 鐘をもたらず。そういう死霊は邪霊であり、したがってそれを鎮魂して村から送り出す必要がある。そうしてこそ祖霊は無事迎えらるという考え方が日本の伝統的な靈魂観でありお盆という習俗の捉え方であった。東北地方ではお盆の邪霊鎮送の役割を担ったのがシシ踊りという芸能だったといえる。それは村を守るための共同芸能の性格を有する。
- (4) 日本の民俗芸能のなかで、野生動物に扮して死者供養を行なうのはシシ踊りのみである。そこには東北地方固有の歴史風土や動物観念が底流にあるといえる。「鉄砲踊り」「案山子踊り」「山越え」「太刀使い」などの演目に見る内容や歌詞、動物の所作を思わせる芸態は、十分に野性味を感じさせるものである。狩猟時代やそれ以降の農耕時代をつうじた人々と野生動物との深い関わりは、聖獣観や害獣観などのよじれた複雑な観念を生み出し、それがシシ踊り発生のもととなり、演目にも如実に投影されているとみられる。
- (5) 実際に鹿ツノをつけたカシラ、鹿や猪ときには熊を思わせる風貌などの現状は、今なお野獣性を強く残した芸能であることが認められる。まさにシシ踊りの東北的なものの本質をそこに見ることができる。
- (6) 東北地方以外の東日本の三頭シシ踊り（三匹獅子舞）の役割は、主として悪魔払い・悪疫退散・雨乞いである。東北地方のシシ踊りの役割と比較してその違いは歴然としている。盆の死者供養の役割は栃木県塩谷町など一部をのぞきほとんどみられない。このことにおいてシシ踊りを通じた東日本における歴史風土の違いがおのずと浮き彫りとなる。
- (7) 当然ながら、東北地方のシシ踊りをすべて一括して論じきることは無理である。大切なことは、地域の実態に即して個別的に分析・検討し、成立土壌としての歴史文化性をできるだけ明確にすることであろう。その上に立ったシシ踊り論でなければならない。そういう立場にたつてこそ、おおよそその地域類型化が可能となってくる。本研究ではそういう考え方のもとで、とりあえず九つのシシ踊り文化圏を提示することができた。いわずもがな東北地方は多様である。しかし一方では、六県のそれぞれの発展と暮らしの特徴、または歴史文化的関連性も見えてくる。提示した文化圏は、シシ踊りという庶民芸能を手掛かりに東北地方のこれまでの歩みについて再考する糸口ともなりうると考えている。
- (8) 本研究では、今後に向けた問題提起や再検討すべき課題を積極的にとりあげた。シシ踊りの成立期は、これまでは江戸時代初期とする考え方があった。しかし、「貞山公治家記録」をはじめとする史料や本文で述べたシシ踊りの東北的な実態を踏まえれば、江戸時代以前にさかのぼることができることを明らかにした。また、東北地方の中世後期以降の村落社会には、部分的ながらシシ踊りを構成する基盤や要素はあった可能性を論じた。むろん農民だけの力ではなく村の有力者の介在があつてはじめて可能だったともいえる。このことは、中世においては東日本とりわけ東北地方では風流踊りを成立させるだけの郷村・惣村が成立しなかったという従来の見方に対し、一部なりとも再検討を迫るものである。
- (9) 東北地方の多頭シシ踊りは、主流である関東系の三頭シシ踊り（三匹獅子舞）が伝播し発展したものといわれてきた。しかし、東北地方のシシ踊りを歴史的に考察すると必ずしもそうではない実態がみられた。三頭シシ踊りの伝播以前に先行・土着する多頭のシシ踊りの存在が考えられる事例を青森県・秋田県・福島県などにみた。東北地方になぜ多頭のシシが存在したか。それについては、一つの可能性として、威力をもつ邪霊の鎮送のためにはより多くのシシの頭数、言い換えれば集団的呪力が必要と考えられたことが指摘できよう。
- (10) 東北における先行・土着のシシ踊り存在の可能性は、西日本の太鼓踊りがやがて東日本のシシ踊り、とりわけ関東地方の三頭シシ踊り（三匹獅子舞）に発展したとする見方に対して再検討を促すものである。本田安次は、すでに岩手県遠野地方の「鹿踊り」と西日本の太鼓踊りの歌と踊りを比較・

検証した結論を述べていた。つまり、西日本の太鼓踊りよりも遠野地方のシシ踊りが古風であり、これまで発生源だと考えられていた太鼓踊りのほうが新しいという立場であった。このことは、太鼓踊りなどがもとになって成立したと考えられてきた関東地方の三頭シシ踊りよりも、東北地方の多頭シシ踊りが先に成立した可能性をも示唆したといえる。

- (11) この本田の見解を導きとしながら、東日本のシシ踊りの発生については、あらためて東北地方の視点を加えた立場から再検証すべきときである。西日本を発生源とする文化伝承の一面的見方ではシシ踊りという芸能を正しく捉えることはできないだろう。この問題の解明には、列島の東西を比較しながら日本文化の多様性・多重性という視点において、さらなる検討を加える必要性を痛切に感じる。
- (12) ところで、原始的な動物踊りには、先に触れたように野獣への感謝や供養、または害獣駆除の願望などの複合性・重層性があったとみられる。その原始性・野獣性を加味して芸能化されたと考えられるのが東北地方のシシ踊りである。いつ現在に近いシシ踊りが芸能化されたのか。それは中世に獅子舞を奉じる鎮魂呪力をもった修験山伏の関与・助力による可能性を提示したのが本研究のもう一つの特色である。その根拠の一つに東北の広い範囲にわたってシシのカシラ儀礼が厳格に行われていることをあげた。多くがカシラを祭壇に祀って「精霊化」させるのであった。こうしてこそシシは盆の邪霊を鎮送する大いなる呪力を発揮できたと考えるのである。ハツ鹿踊りが行っている「四門くぐり」も修験山伏の儀礼がもとだったことを示した。
- (13) これらのことは、東北におけるいわば「シシの獅子化（権現化）」の過程でもあった。シシの芸能化は、知恵者の修験山伏とそれを望んだ村落とのいわば協働行為だったのではないかという見解も提示した。そうすると、なぜ鹿や猪（シシ）のカシラが選択されたかについて、人との歴史的関わりの深さとともに、「シシ」と「獅子」が同音であることに着目した試みだった可能性も残されている。こうして、修験山伏の「山の獅子」に対する、村落社会の「里のシシ」が生まれた。
- (14) 柳田国男は、日本では獅子舞の伝播以前にすでに鹿の頭を祭に供える慣習を持っていたと認識し、東北地方の「鹿踊り」は鹿のカシラを神に捧げる祭りごとのなかで成立したと考えた。柳田のシシ踊り生け贅説に必ずしも同意するものではないが、その考えのなかに動物のカシラ儀礼や頭骨信仰が古くからあったことが示されていて、大変示唆的である。現在行われている「精入れ」「獅子起こし」などの儀礼は、かつての鹿のカシラの祭りに繋がっているかもしれないと考えるのは憶測にすぎないだろうか。じつに重みのあるテーマであり今後の研究課題としたい。
- (15) 以上のような経緯で鎮魂呪力を付与されたシシ踊りは、諸国を遊行する念仏聖などによる念仏系踊りの関与や、関東方面からの三頭シシ踊り（三匹獅子舞）の影響も加わり、現在のようなシシ踊りの姿となったと考えられるのである。
- (16) 本研究では、シシ踊りが鎮魂供養の役割を担うようになる社会史的要因として、特に江戸時代においては飢饉による大量の餓死者・疫死者があったのではなかろうかとの立場において考察を進めた。それらの怨霊を鎮めなければ凶作・飢饉は幾度となく襲いかかるだろうと考えた人々は、じつに丁重な弔いと五穀豊穡への祈りをシシ踊りに込めたと思われる。為政者が率先して犠牲者の年忌の供養を行っている実態は、怨霊の社会不安を解消し村民の労働意欲を喚起する手段という側面を窺うことができる。盆供養で踊るシシ踊りを「豊年獅子踊」といい、山形県置賜地方のシシ踊りが掲げる纏に「作祭り」「五穀豊穡」と記すのは、鎮魂供養を媒介としたシシ踊りと農耕の繋がりを示している。豊作を実現するためにもシシ踊りは盛んに踊られたといえる。
- (17) こうしてシシ踊りは、東北地方の狩猟・農耕・飢饉などの歴史風土性を色濃く反映した独特な庶民芸能として継承されてきた。シシ踊りをつうじて東北地方の歴史的文化的特質が明らかにされると

もいえるだろう。

おわりに

日本列島の東と西の文化的相違を考えるなかでシシ踊りを捉える必要があるのではないか、以前からそういう問題意識を引きずってきた。シシ踊りは東日本にのみ分布する庶民芸能であり、西日本には例外である愛媛県等のものを除きまったく分布しない。かくもみごとな棲み分けはどうして起こったのか。この現状を東西文化の枠組みのなかで考えることは可能かどうか、今後積極的に検討してみる必要性を覚えている。

さらに、東日本でも関東地方と東北地方のシシ踊りの相違は、やはり社会史や民俗文化の相違という文脈のなかで考えることの必要性を痛感している。

たんに芸能史的側面からのみ検討を加えるだけでは、シシ踊りを歴史民俗的に解明することは難しい。ということは、芸能分野の知見のみならず他の学問の助力や連携を必要とする。たかがシシ踊りといえども、気候風土も含めた総合的な人文科学的知見のもとで分析・検討されなければ、本当の姿はみえてこない。シシ踊り研究の途上にある現在、そのことを今後の研究上の命題としたい。



写真1 墓地で演じる青森県平川市の古懸獅子踊

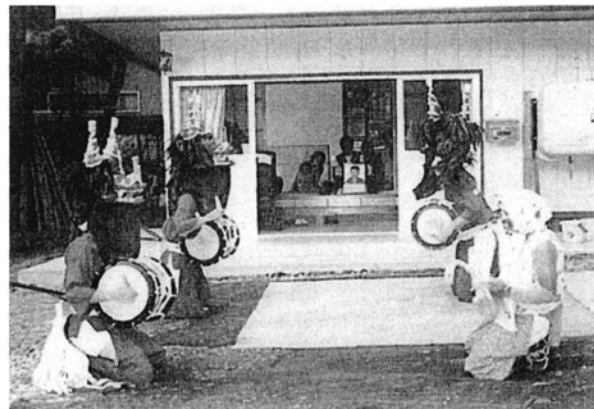


写真2 新仏の遺影を前にして踊る秋田県仙北市の白岩ささら



写真3 新仏の遺影を前にして踊る岩手県奥州市江刺区の餅田鹿踊

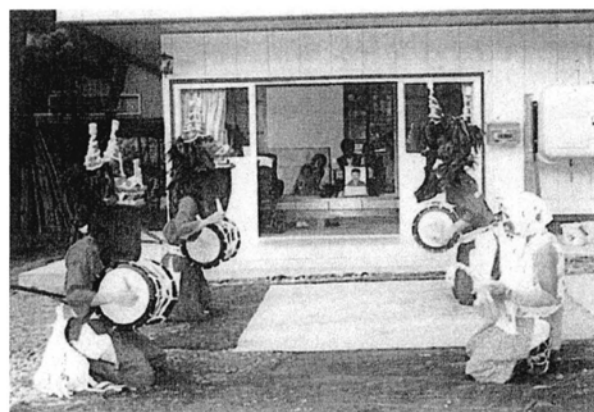


写真4 新仏の遺影を前に演じる山形県寒河江市の内楯旭一流獅子踊



写真5 春彼岸に家々の庭先で演じる会津彼岸獅子の
子の一つ、天寧獅子



写真6 埼玉県川越市の石原ささら獅子舞 右端
が指揮棒を持つ「山の神」



写真7 福井県小浜市の雲浜獅子



写真8 愛媛県北宇和郡吉田町立間の「鹿の子」
(七ツ鹿踊り)



写真9 無縁仏に手を合わせる比立内獅子踊（秋
田県北秋田市）



写真10 無縁仏供養 秋田県北秋田市の荒瀬獅子
踊はこの手前で演じる

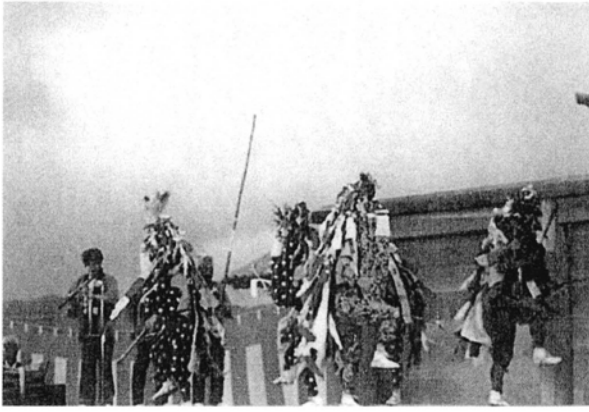


写真11 施餓鬼旗を背中にして踊る酒田市新田目獅子踊



写真12 鹿踊供養碑「南無阿弥陀仏」(岩手県奥州市江刺区梁川の久田鹿踊)



写真13 鹿踊供養碑「南無阿弥陀仏」(岩手県奥州市江刺区の鶴羽衣鹿踊)



写真14 岩手県金ヶ崎町の三ヶ尻獅子踊の鹿踊供養碑(平成11年造立)



写真15 山形県村山市深沢獅子踊のカシラの風貌



写真16 「山越え」を演じる青森県平川市の古懸獅子踊



写真17 「かかし」を演じる岩手県角懸鹿踊（左手前の帽子姿の人物が案山子役）



写真18 岩手県八日市鹿踊の「案山子踊り」



写真19 「棒使い」「太刀使い」の演技（山形県鶴岡市（旧藤島町）の添川獅子踊）



写真20 岩手県の早池峰神楽の権現様

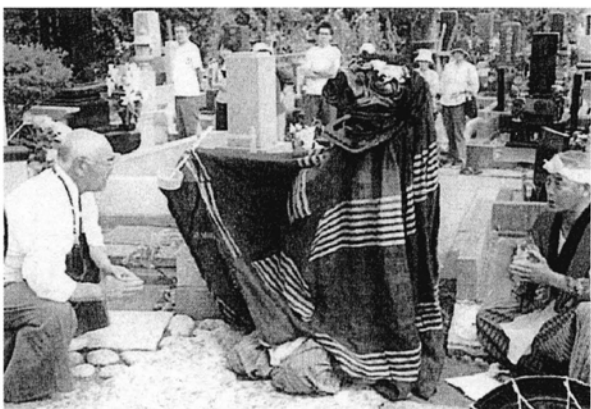


写真21 八戸市の鯨神楽の「墓獅子」



写真22 山形県鶴岡市（旧藤島町）八色木獅子踊の「精入れ」の儀礼



写真23 幕踊り系の墓地での供養踊り（岩手県岩泉町の釜津田鹿踊）



写真24 山寺立石寺で演じる天童市高掬聖霊菩提獅子踊（「かかし」の演目）



写真25 鶴岡市（旧藤島町）のシシ郷（渡前地区）に造立された「獅子神」（昭和58年造立、かつての石碑には「南無阿弥陀仏」と刻印されていた）

東北地方の シシ踊供養分布略図

秋田県

- 1 能代市の常州下御供佐々楽（道地ささら）
- 2 秋田市（旧阿仁町）の荒瀬獅子踊
- 3 北秋田市（旧阿仁町）の比立内獅子踊
- 4 仙北市（旧角館町）白岩地区の白岩ささら
- 5 仙北市（旧角館町）下川原地区の下川原ささら
- 6 大仙市（旧中仙町）の東長野ささら
- 7 大仙市（旧中仙町）の長野ささら

山形県

- 1 酒田市（旧八幡町）青沢地区の青沢獅子踊
- 2 酒田市本楯地区の新田目獅子踊
- 3 鶴岡市（旧藤島町）添川地区の添川獅子踊
- 4 寒河江市内楯地区の内楯旭一流獅子踊
- 5 山形市山寺立石寺に集う「山寺系獅子踊り」
- 6 朝日町大谷地区の角田流大谷獅子踊
- 7 川西町小松地区の小松豊年獅子踊
- 8 米沢市綱木地区の綱木獅子踊

青森県

- 1 弘前市の一野渡獅子踊
- 2 弘前市の乳井獅子舞
- 3 弘前市の大沢獅子踊
- 4 平川市（旧平賀町）の沖館獅子踊
- 5 平川市（旧平賀町）の広船獅子踊
- 6 平川市（旧碓ヶ関村）の古懸獅子踊
- 7 西津軽郡大鰐町の三ツ目内獅子踊
- 8 深浦町（旧岩崎村）の大間越獅子踊
- 9 深浦町（旧岩崎村）の久田獅子舞
- 10 青森県三沢市岡三沢地区の岡三沢鹿子踊

岩手県

- 1 下閉伊郡岩泉町の釜津田鹿踊
- 2 遠野市附馬牛町の上柳しし踊り
- 3 奥州市江刺区梁川地区の
行山流久田鹿踊
- 4 奥州市江刺区岩谷堂地区の
奥山行上流餅田鹿踊
- 5 金ヶ崎町北方地区の
奥野流富士麓行山北方鹿踊

宮城県

- 1 気仙沼市早稲谷の早稲谷鹿踊

福島県（会津彼岸獅子）

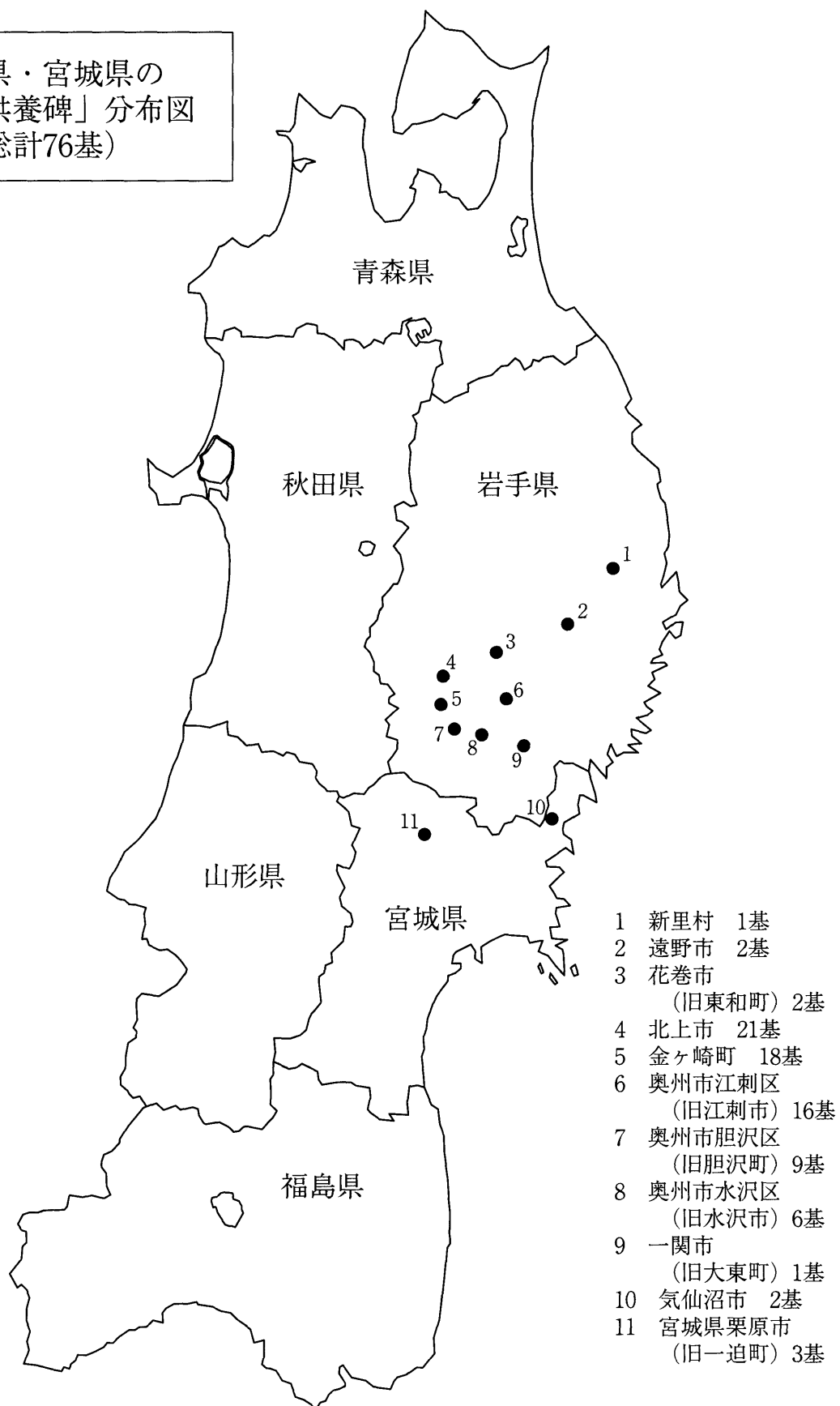
- 1 喜多方市の下柴獅子
- 2 喜多方市の中村獅子
- 3 会津若松市天寧地区の天寧獅子
- 4 会津若松市一箕町の下居合獅子
- 5 会津若松市一箕町の本滝沢獅子
- 6 会津若松市（旧北会津村）の小松獅子



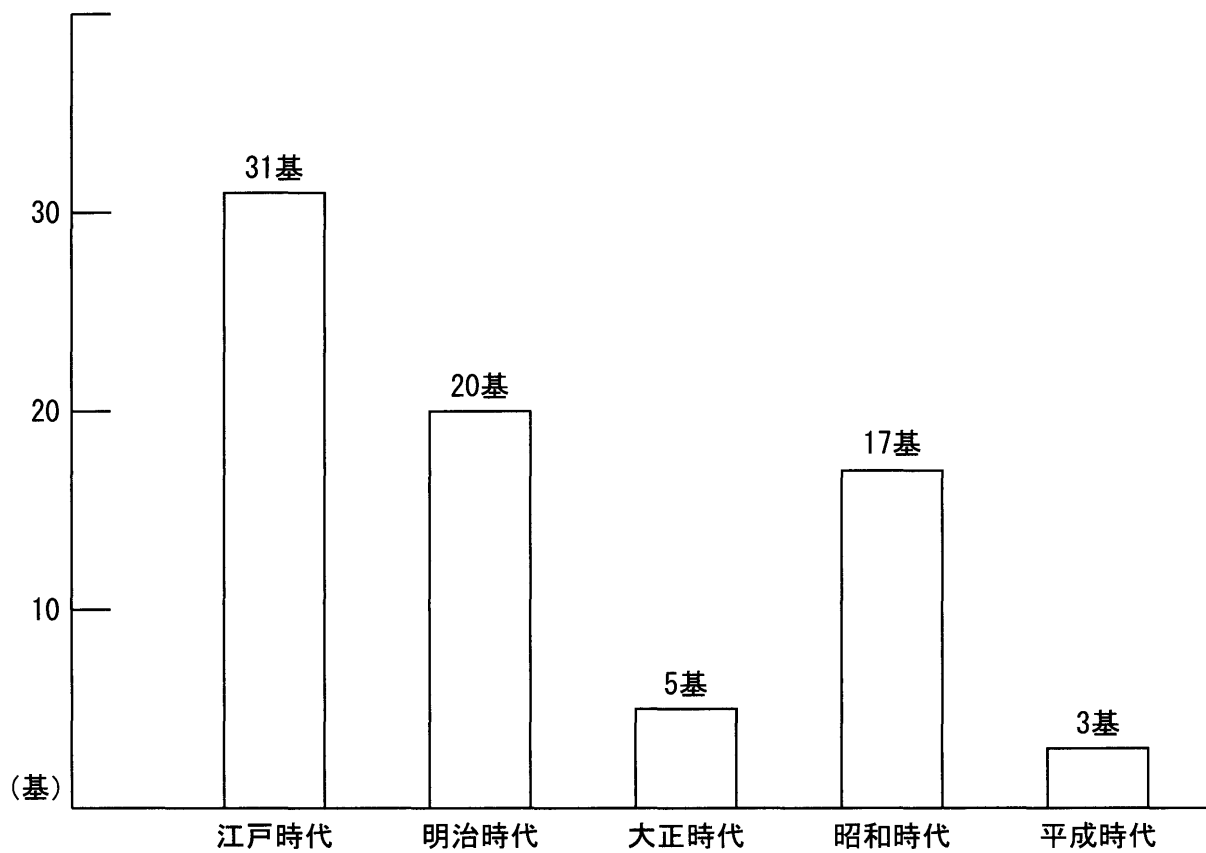
資料2 東北地方の盆期間の習俗一覧（無縁仏供養）

| | 旧暦7月7日 (現8月8日) | 13日 | 16日 | 20日 | 摘要 |
|----|--|--|---|-------------------------|--|
| 青森 | ・ナヌカビ（津軽） ・ナヌカボン（南部） 墓地の草取り・清掃 「七回水浴びして、 七回飯（うどん）を 食べる」 | ・盆棚づくり（ガキメシ を供える） ・ホカイ（津軽・南部と も） ・夕方、墓参り。墓前に 赤飯など供え物をして 供養 ・迎え火（墓前、門口） ・新仏の家では48燈籠 | ・早朝、盆棚を川へ流 す ・仏送り（送り盆） ※ <u>地獄のカマのふたが あく</u> （川内） | ・仏送り （二十日盆） | ・新仏の家では7月1 日頃から高燈籠。 ・ホゲサライ（墓の供 え物を子どもが持つ ていく／下北半島） |
| 岩手 | ・ナヌカビ（ナノカボ ン） 墓掃除、墓参り ・ハカハライ（墓払い） 「七回水浴びして七 回飯を食べる」 | ・施餓鬼棚—盆棚の下に は無縁仏（ムギホー ゲー）への供え物（オ ミヤゲ）あり ホトケサマノツエ、ホ トケサマノハキモノ、 帰りのフネを供える （田野畑村・菅窪） ・14日早朝墓参り、迎え 火。15日は午後のみ | ・送り盆（送り火） ・ホトケオクリ、盆棚 を川に流す ※ <u>地獄のカマのふたが あく</u> （水沢市） | ・二十日盆 | 三十一日盆（ミソカボ ン）、送り盆（北上市 口内） ※8月1日のマツアカ シ（松明かし）、盆 のはじまりをあらわ す（宮古市） |
| 宮城 | ・ナノカビ ・墓ハライ 「七回水浴びして七 回食べる」 ・「七夕踊り」 | ・盆棚づくり、盆棚わき に無縁仏への供物 ・迎え火 ・新仏の家では燈籠柱を 立てる | 14日（早朝暗いうちに 提灯をつける）～16日 （送り火） 墓参り 供物を川に流す ※ <u>地獄の釜のふたがあ く</u> | ・オワリ盆（送り 火） ・二十日盆 | 三十日盆（ミソカボ ン）送り盆 三十一日送り盆 |
| 秋田 | ・「タナバタのササラ スリ」（下戸沢） ・ナヌカビ ・墓払い ・迎え火（島田目） 「ショウライタチ、ショ ウライタチ、この火 の明りでジッコもバ バコも来とな来とな」 墓に火をかざす 「七回水浴び、七回 ご飯を食べる」 | ・精霊棚づくり ・墓参り（または14日早 朝） ・墓ササラ（木正沢、檜 木内） ・共同墓地（ラント）で 持ち寄った重箱を開い て先祖とともに食べる | ・送り盆、盆棚・供え 物を川に流す ・送り火 | ・二十日盆 ・送り火 | 十三日夜「ハカムシ リ」の習俗 子供が墓に供えた食べ 物を持っていく 7月1日「釜の口開 き」 |
| 山形 | ・墓掃除 ・墓払い ・ミガキ盆（横田尻） ・七日盆 「七回水浴びして七 回赤飯を食べる。女 性は髪を七回洗う」 ・早朝に墓参り（東根 市入地区） | ・墓参り ・盆棚づくり、ガキゴメ を供える ・迎え盆 ・迎え火 ・新仏の家では3年間高 燈籠を立てる（13日～ 16日、北青沢） ・墓地では先に無縁仏に ガキマイ（ガキゴメ） を供えてから墓参りを 行う。（小国町） | ・送り盆 ・送り火 ・魂送り（谷地） ・オカエリ（通町） オカエリダンゴをつ くる ・ミヤゲダンゴ（宮野 浦） ・仏壇に供えたダンゴ を送り火とともに焼 く。「来年もござれ」 （寒河江市洲崎） | ・二十日盆 ・アト盆（志津） | 二十四日 うら盆（田 川、田麦俣） 二十三日以降 庄内地 方は死霊がモリの山に 集まるので参詣に行く （施餓鬼供養） ・ハカヤッコ＝墓の供 え物を子供が持つて いく（庄内地方。内 陸地方も一部あり） |
| 福島 | ・墓掃除 ・ナノカ盆 ・カマブチツイタチ （叶津） ・新仏の家では高燈籠 を立てる | ・盆棚をつくる。片隅に 無縁仏も祀る ・迎え火 ・14日墓参り | ・送り盆 盆棚、お供え物を川 に流す ・オクリダンゴ ・盆棚や供え物を川に 流す | ・二十日盆 送り火 | ・新仏の家では7月1 日頃から高燈籠。 |

岩手県・宮城県の
「鹿踊供養碑」分布図
(総計76基)



岩手県・宮城県
「鹿踊供養碑」時代別造立数
(総計76基)



資料 3-3 北上市・金ヶ崎町「鹿踊供養碑」一覧

北上市内供養碑

| (1) 北上市（二〇〇六年八月三十一日実施調査） | | |
|--------------------------|--------------|-----------|
| ①獅子舞躍供養 | 嘉永元年七月廿日 | 沢田昭二氏敷地 |
| ②鹿躍供養 | 明治二年七月 | 同上 |
| ③鹿舞供養 | 昭和二年七月十五日 | 宝龍神社境内 |
| ④獅子踊念仏供養塔 | 寛政十二年九月十三日 | 同上 |
| ⑤獅子躍供養塔 | 弘化四年七月十三日 | 四区道場 |
| ⑥鹿躍供養 | 明治十三年九月十三日 | 永昌寺境内 |
| ⑦鹿踊供養 | 大正三年七月六日 | 深山神社境内 |
| ⑧獅子供養塔 | 明治四十三年 | 臼井墓地参堂脇 |
| ⑨鹿踊供養 | 明治十四年九月二十九日 | 水車所在地 |
| ⑩鹿踊供養塔 | 昭和四十三年九月十五日 | 古峰神社 |
| ⑪鹿踊供養碑 | 昭和五十一年九月二十三日 | 浅間神社境内 |
| ⑫南無阿弥陀仏 | 文化十一年八月二十六日 | 不動明王境内 |
| ⑬供養塔 奴踊 剣舞 鹿子踊 | 昭和二十六年十月二十八日 | 菅原神社境内 |
| ⑭鹿踊供養碑 | 明治（判読不能） | 新田地区 |
| ⑮獅子躍供養碑 | 明治十四年 | 古館神社境内 |
| ⑯鹿踊供養碑 | 明治三十九年 | 相去町 洞泉寺 |
| ⑰獅子躍供養碑 | 文政二年八月初朔日 | 立花吉内地区 |
| ⑱仰参躍記念碑 | 明治三十四年 | 二子町 |
| ⑲鹿踊供養碑 | 明治四十三年 | 臥牛 |
| ⑳鹿踊供養碑 | 弘化三年七月 | 沢目田ノ神社社境内 |
| ㉑鹿踊供養碑 | 明治二十六年 | 沢目 |

金ヶ崎町内供養碑

| (2) 金ヶ崎町（二〇〇六年八月三十日実地調査） | | |
|--------------------------|-------------|-------------|
| ①皆白迎参踊供養 | 明治六年八月吉日 | 三ヶ尻字町田 |
| ②皆白行山鹿踊供養 | 昭和五十六年十一月吉日 | 三ヶ尻字町田 |
| ③皆白行山鹿踊供養 | 平成十一年十一月吉日 | 三ヶ尻字町田 |
| ④富士日本行山踊供養 | 天保十五年九月九日 | 西根字揚場 |
| ⑤富士麓鹿舞行山躍供養 | 明治廿一年八月二十九日 | 西根字揚場 |
| ⑥富士麓行山躍供養 | 大正八年八月一日 | 西根字揚場 |
| ⑦富士日本行山躍供養 | 文化元年九月八日 | 西根字揚場（所在不明） |
| ⑧富士麓行山躍供養 | 明治五年九月吉日 | 西根字揚場（所在不明） |
| ⑨猪踊供養 | 宝暦十三年七月 | 西根字上畑町 |
| ⑩富士麓行山躍供養 | 明治十二年十月二十九日 | 西根字妻根 |
| ⑪富士麓行山獅子躍供養 | 明治十四年 | 西根字八荒神 |
| ⑫為獅跳供養石塔菩提 | 享保二十年八月十五日 | 西根字千貫石 |
| ⑬富士麓行山踊供養 | 明治十二年七月吉日 | 西根字川田堤向 |
| ⑭富士麓行山踊供養 | 昭和六十二年七月十六日 | 永栄字細野 |
| ⑮富士麓行山踊供養 | 元治元年八月二十九日 | 永沢字堀北後 |
| ⑯富士日本行山躍供養 | 寛政十二年八月八日 | 永沢字南黒沢 |
| ⑰富士麓行山 | 明治十三年八月十日 | 西根字横街道 |
| ⑱奥野流富士麓行山鹿踊供養之碑 | 昭和六十三年十一月吉日 | 西根字二ツ堤 |

資料4 シシ踊り演目「鉄砲踊り・案山子踊り」所有団体（廃絶も含む）

| | 団 体 名 | 「鉄砲 踊り」 | 「案山子 踊り」 | 摘 要 |
|----|-----------------|------------|-------------|---|
| 1 | 久田鹿踊（岩手県） | ○ | ○ | 「墓回向」の演目と歌詞（7つあり） |
| 2 | 釜津田鹿踊（〃） | × | ○ | 墓歌、せがき歌、あり |
| 3 | 大川鹿踊（〃） | × | ○ | 御墓祓い、花コ讃、舟和讃 |
| 4 | 岩泉踊こ（4種の踊り、岩手県） | ○ | ○ | 「黍とり」の演目で、左2つを意味する |
| 5 | 有芸鹿踊（岩手県） | ○ | ○ | 「鉄砲鹿々前口上」あり |
| 6 | 宮野目鹿踊（〃） | ○ | ○ | 墓踊りはかつてあった |
| 7 | 八幡獅子踊（〃） | × | ○ | |
| 8 | 江曾獅子踊（〃） | ○ | ○ | |
| 9 | 湯本鹿踊（〃） | ○ | ○ | 「鹿ノ由来」あり |
| 10 | 梁川鹿踊（〃） | ○ | × | 「墓回向」あり |
| 11 | 鶴羽衣鹿踊（〃） | ○ | ○ | |
| 12 | 餅田鹿踊（〃） | ○ | ○ | |
| 13 | 笹崎鹿踊（〃） | ○ | ○ | もとは盆に「ばんがく」と言って踊り歩く（3日間） |
| 14 | 鹿妻鹿踊（〃） | × | ○ | 鉄砲踊と一体となっている。「墓踊」あり もとは盆に「ばんがく」と言って踊り歩く（3日間） |
| 15 | 清水目鹿踊（〃） | × | ○ | 鉄砲踊と一体となっている。「墓踊」あり |
| 16 | 金ヶ崎北方鹿踊（〃） | ○ | ○ | 「供養の唄」あり |
| 17 | 三ヶ尻鹿踊（〃） | ○ | ○ | 佛歌（墓回向）あり |
| 18 | 細野鹿踊（〃） | ○ | ○ | |
| 19 | 紫野鹿踊（〃） | ○ | ○ | |
| 20 | 小通鹿踊（〃） | ○ | ○ | |
| 21 | 駒木鹿子踊（〃） | × | ○ | |
| 22 | 鷹鳥屋獅子踊（〃） | × | ○ | |
| 23 | 張山しし踊（〃） | × | ○ | 「墓獅子」の演目あり |
| 24 | 上抑しし踊（〃） | × | ○ | 「施餓鬼棚ほめ」演目あり |
| 25 | 角懸鹿踊（〃） | ○ | ○ | |
| 26 | 八日市鹿踊（〃） | × | ○ | |
| 27 | 伊手金津流獅子踊（〃） | ○ | ○ | |
| 28 | 梁川金津流獅子踊（〃） | ○ | ○ | |
| 29 | 軽石鹿踊（〃） | ○ | ○ | |
| 30 | 石関鹿踊（〃） | ○ | ○ | |
| 31 | 地の神鹿踊（〃） | ○ | ○ | |
| 32 | 内ノ目鹿踊（〃） | ○ | ○ | 8月14～16日 お寺や商店街で「礼庭」を踊って精霊を供養 |
| 33 | 白石鹿踊（〃） | | ○ | |
| 34 | 更木鹿踊（〃） | ○ | ○ | |
| 35 | 口内鹿踊（〃） | ○ | ○ | |
| 36 | 相去鹿踊（〃） | ○ | ○ | |
| 37 | 臥牛鹿踊（〃） | ○ | × | |
| 38 | 切幕行作流更木鹿踊（〃） | × | ○ | |

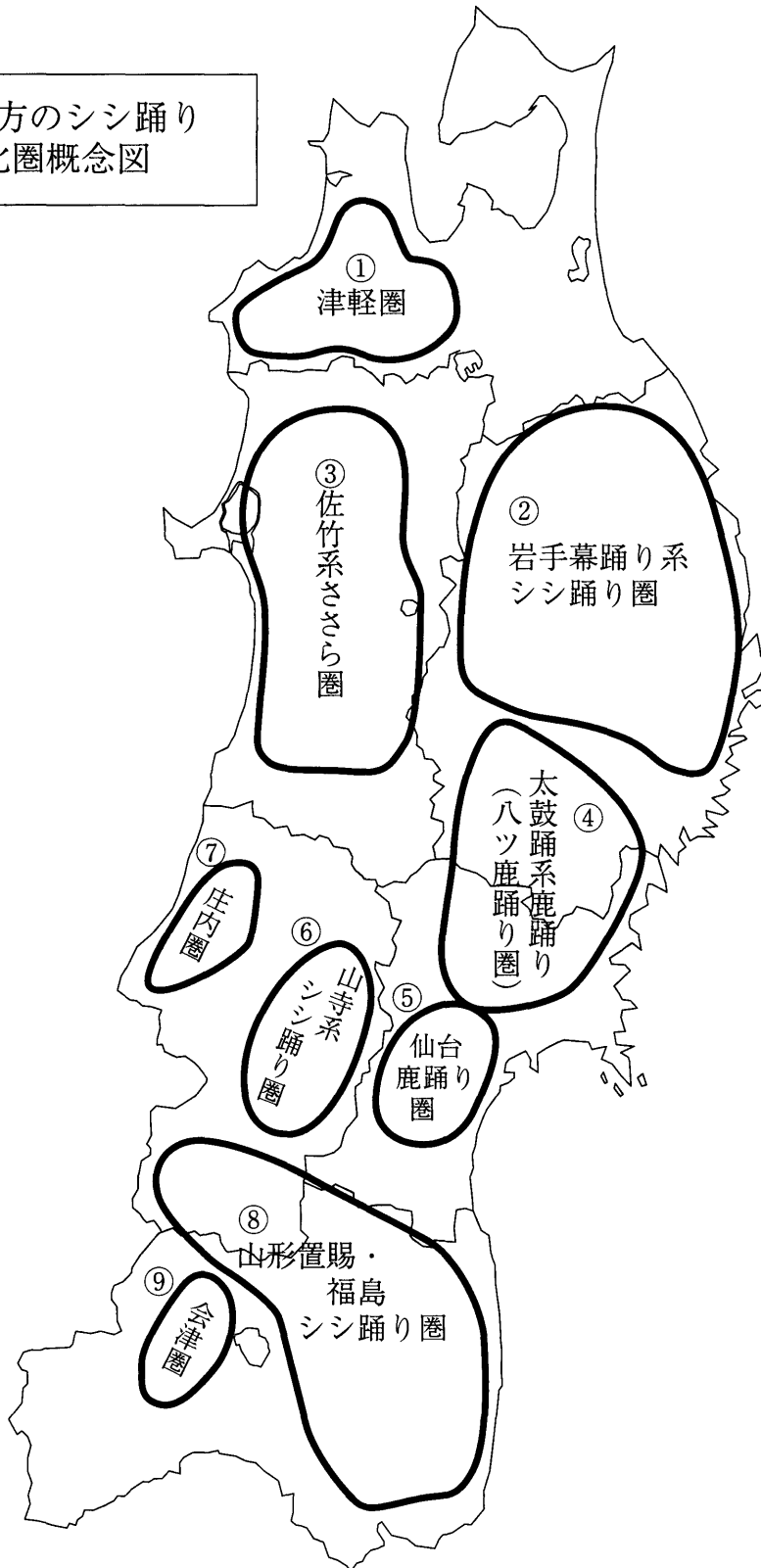
| | | | | |
|----|----------------------|---|---|--------------------|
| 39 | 富士麓行山流鹿踊（〃） | ○ | ○ | |
| 40 | 伊藤流行山鹿踊（〃） | ○ | ○ | |
| 41 | 増沢鹿踊（〃） | ○ | ○ | |
| 42 | 鴨沢鹿踊（〃） | ○ | ○ | お盆（14～16日）に踊る墓回向あり |
| 43 | 田野畑鹿踊（〃） | × | ○ | |
| 44 | 行山流舞川鹿子踊（〃） | × | ○ | |
| 45 | 行山流高瀬鹿子踊（〃） | ○ | ○ | |
| 46 | 行山流外館鹿子踊（〃） | × | ○ | |
| 47 | 春日流落合鹿子踊（〃） | × | ○ | |
| 48 | 小沢鹿踊（〃） | × | ○ | |
| 49 | 菅窪鹿踊（〃） | × | ○ | |
| 50 | 山谷鹿踊（〃） | × | ○ | |
| 51 | 永浜鹿踊（〃） | ○ | ○ | |
| 52 | 附馬牛獅子踊（〃） | × | ○ | 「墓獅子」あり |
| 53 | 舞出鹿踊（〃） | ○ | ○ | |
| 54 | 川前鹿踊（宮城県） | × | ○ | |
| 55 | 上谷刈鹿踊（〃） | × | ○ | |
| 56 | 早稲谷鹿踊（〃） | ○ | ○ | |
| 57 | 福岡鹿踊（〃） | × | ○ | |
| 58 | 鹿楽招旭踊（山形県山形市） | × | ○ | |
| 59 | 聖霊菩提獅子踊り （山形県天童市） | × | ○ | |
| 60 | 土橋獅子踊り（山形県中山町） | × | ○ | |
| 61 | 深沢獅子踊（山形県村山市） | × | ○ | |

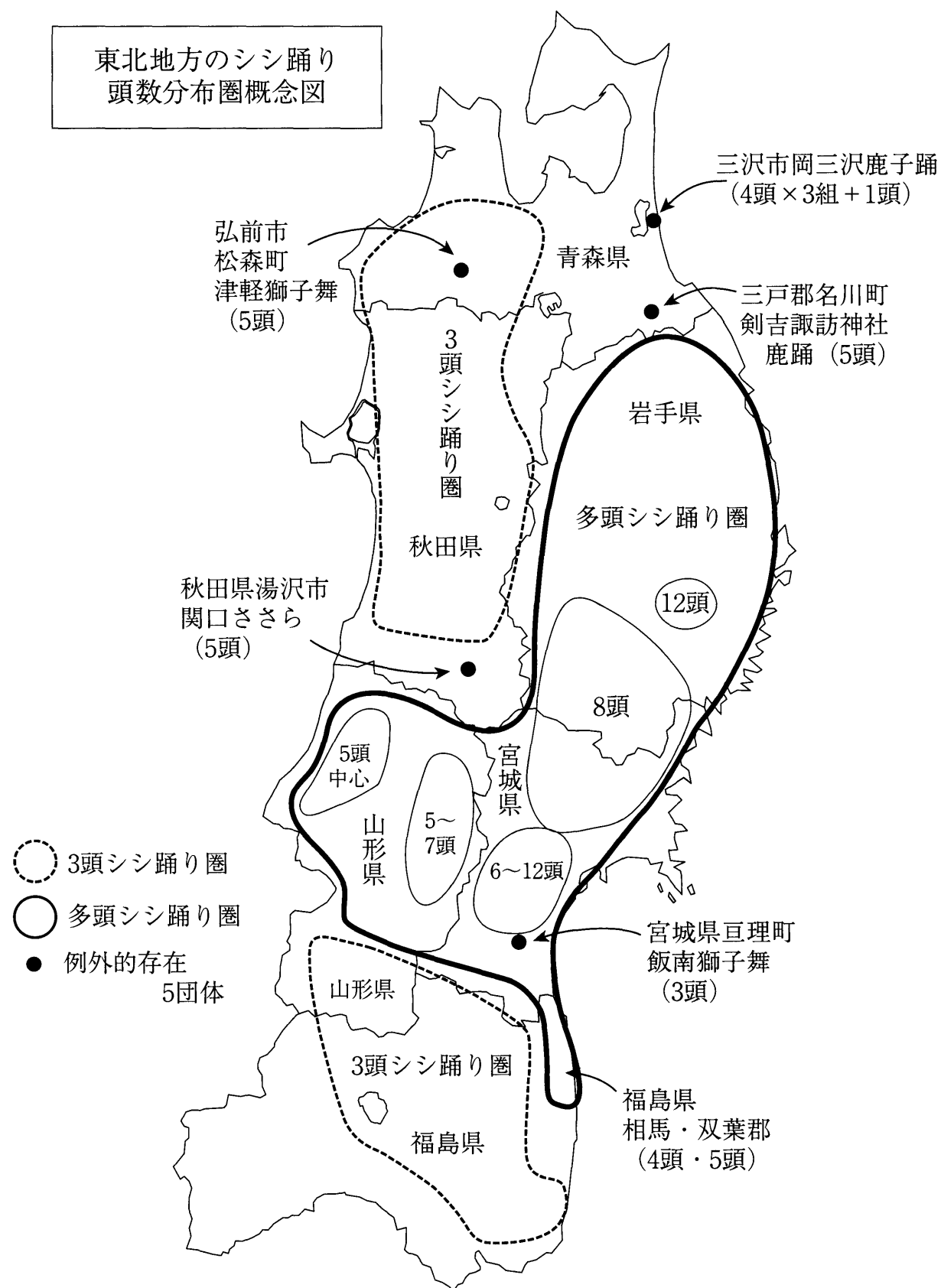
資料5 東北地方のシシ踊り儀礼一覧（代表的事例）

| 県名 | 団体名 | 踊りはじめ | 踊り終わり | 摘要 |
|-----|--|---------------------------------------|--|---|
| 青森県 | 一野渡獅子踊 (弘前市) | 旧暦7月14日「獅子舞初め」(「獅子起こし」) 現在は8月14日実施 | 「獅子舞納め」かつては収穫後の秋休み 現在は12月1日頃実施 ツノをもぐ仕草をして「ウタノツムギ」という呪文をとる。 | 獅子頭を祈祷してから「山越え」「橋渡し」などの演目を踊る。 |
| | 大沢獅子踊 (弘前市) | 旧暦7月14日「獅子起こし」 | 11月23日～26日「獅子納め」 | 「獅子起こし」は謡いを唄う。「獅子納め」は獅子頭をもって家々をまわる。 |
| | 古懸獅子踊 (平川市) | 3月「幕降ろし」(「獅子起こし」) | 12月「獅子納め」 | |
| | 沖館獅子踊 (平賀町) | — | 9月下旬(秋さなぶり) 「獅子納め」 | 「獅子納め」は盛大なお膳が出て、すべての演目を踊る。 |
| | その他の津軽地方では、旧暦8月2日「獅子起こし」、旧暦9月29日「獅子納め」。さらには旧暦7月7日「魂入れ」、9月の秋祭り終了とともに「魂抜き」という所あり。団体によっては、桃の木の枝で目つぶしの所作を行ったり、御神酒を飲ませたり、生魚を食べさせるしぐさをして、シシを鎮める。 | | | |
| 秋田県 | 戸沢ささら (仙北市西木村) | 旧暦7月7日「笠揃い」 | 旧暦8月15日「獅子納め」(「笠納め」) | 「獅子納め」では太夫が獅子頭の髪を切り、来年まで休むよう祈る。 |
| | 比立内獅子踊 (阿仁町) | 旧暦7月13日「笠揃い」 | 旧暦7月20日「獅子納め」 | |
| | 『日本の民俗 秋田』(第一法規)には、旧暦7月7日「笠揃い」、旧暦8月13日「笠納」とある。 | | | |
| 岩手県 | 釜津田鹿踊 (岩泉町) | — | 9月23日「笠払い」 | 踊りはじめは不詳 |
| | 小通鹿踊 (大船渡市) 北方鹿踊 三ヶ尻鹿踊 (金ヶ崎町) | 鹿初め(旧正月) | 「鹿納め」(12月) | 四方に注連縄を張りめぐらして、踊り手が神酒を回して中立は弓矢を四方に射る。世話役はハサミで頭頂のツノガラミのしばってある所を切る。 |
| | 金津流八ツ鹿踊り約6団体 | 舞初め(1月) | 舞納め(12月) | 祭壇にシシのカシラを祀り、「神前の歌」を歌って祈とうする。そのほか「四門くぐり」儀礼あり。 |
| | | | | |
| 山形県 | 八色木獅子踊 (鶴岡市) | 旧暦7月7日「精入れ」 現在は8月7日実施 | 旧暦7月23日「精抜き」(「精戻し」) 現在は8月23日実施 | 「精抜き」の際、師匠が獅子頭の左目上部付近を刀で突き刺す所作をする。その時「エイッ！」と声をあげる。 |
| | 添川獅子踊 (鶴岡市) | 旧暦7月13日「精入れ」 現在は8月13日実施 | 旧暦7月19日「精抜き」 現在は8月19日実施 | |
| | 小中島獅子踊 (鶴岡市) | 旧暦7月7日「精入れ」 | 旧暦7月23日 | 現在は中断している |
| | 渡前獅子踊 (鶴岡市) | 旧暦7月7日「精入れ」(「幕付け」) | 旧暦8月24日「精抜き」 | 現在は中断している |

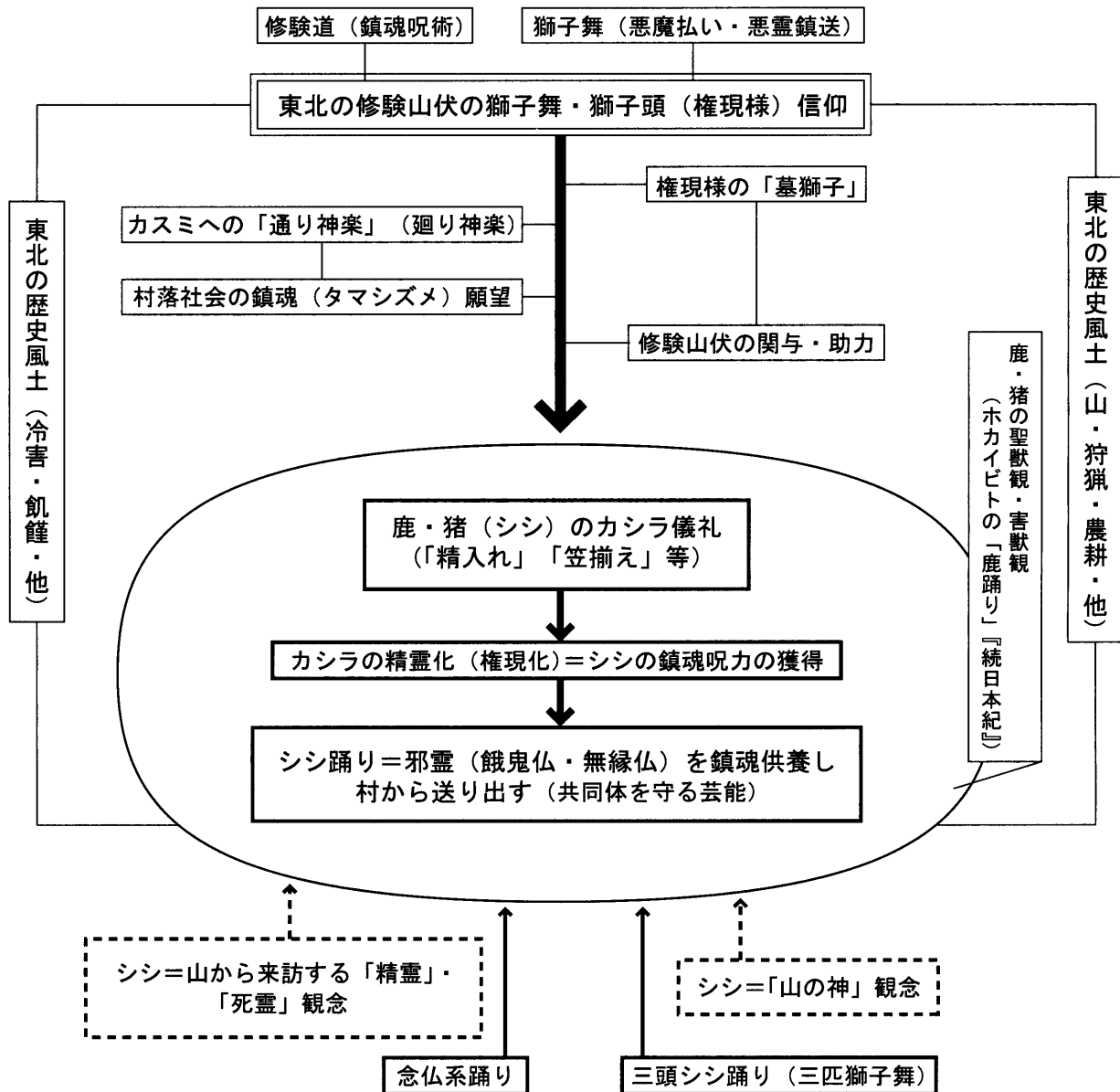
| | | | |
|--|------------------------------------|-----------------------------|--|
| 豊栄獅子踊 (鶴岡市) | 旧暦 7 月 7 日「精入れ」 | 旧暦 7 月 23 日「精戻し」 | 現在は中断している。かつて「祭典獅子」は旧暦 7 月 13 日「精入れ」、7 月 16 日に「精戻し」を行った。 |
| 無音獅子踊 (鶴岡市) | — | 旧暦 7 月 23 日「精抜き」 | 現在は中断している。踊りはじめは不詳。うら盆に行く。 |
| 須走獅子踊 (鶴岡市) | 旧暦 7 月 7 日「精入れ」 | 旧暦 7 月 23 日「精抜き」 | 現在は中断している。 |
| 吉岡獅子舞 (庄内町) | 旧暦 7 月 7 日「精入れ」 | 旧暦 7 月 15 日「精戻し」 | |
| 青沢獅子踊 (酒田市) | 旧暦 7 月 7 日「幕揃え」 | — | 踊り終わりが不詳。 |
| 木の沢獅子踊 (庄内町) | 旧暦 7 月 7 日「精入れ」 (「幕付け」) | 旧暦 7 月 23 日「幕はずし」 | うら盆に行く。 |
| 坂本獅子踊 (酒田市) | 旧暦 7 月 7 日「精入れ」 | 旧暦 7 月 24 日「精抜き」 (「神送り」) | |
| 福島県 | 磐城地方では旧暦 7 月 6 日夜「笠ぞろへ」、「笠ぬき」は日程不明 | | |
| 参考事例：新潟県 北部地方では「幕付け」「幕がり」という始まりと終わりの儀礼がある。 | | | |

東北地方のシシ踊り
文化圏概念図





鎮魂供養シシ踊り成立過程 模式図



論文審査結果の要旨

本論文では、東北地方のシシ踊りを取り上げ、そこにみられる宗教的機能や特質をフィールドワークの成果と文献資料とから把握し、他地域のシシ踊りとの比較も交え、従来まで見られなかった広範囲な観点から歴史的文化的に解明することを目指している。

十一章から成る本論文は、その内容構成から問題提起・事例報告・事例分析の三種に大別される。まず問題提起として、第一章ではシシ踊り研究史の整理がなされ、続く第二章において本論文の問題関心がシシ踊りの機能解明にあることが示される。これを受けて第三章で東北地方の、第四章で関東地方と新潟県の、そして第五章で東北地方から伝播したシシ踊りの事例が、著者自身の長年にわたる豊富な調査の成果に基づいて事例報告される。これらを踏まえて総括される事例分析は、第六章から第八章におき、東北地方のシシ踊りの機能的特徴が鎮魂供養にある点、その鎮魂供養のためには霊獣化されたシシの姿が必要であった点、またそのようなシシ踊りの成立に修験山伏が関与した点などが示される。これらの指摘を手がかりに、それぞれの地域の歴史的展開や文化的特性を加味した観点から東北地方全体のシシ踊りを鳥瞰したのが、第九章の指摘である。続く第十章では、前章で示された九つの文化圏の分析から、関東地方からもたらされた「三頭シシ踊り」がもとになって「多頭シシ踊り」が生まれたとする東北地方のシシ踊りに対する従来までの展開論に異議が唱えられる。そして第十一章では、本論文全体の総括と今後の課題が示される。

本論文の圧巻は、最終章で示される「鎮魂供養シシ踊り成立過程模式図」と「東北地方のシシ踊り文化圏概念図」である。そのどちらもが、従来までの多くの研究者の業績に対する批判的検討に立って構想されたものであるが、地道な調査の中からシシ踊りの行われている現地の社会的歴史的文化的背景に眼を配って整理している点は斬新である。また本論文のよって立つ視角が、先学の多くが行ってきたような狭いものではなく、東北地方の事例のみならず、これを隣接する関東や中部、さらには東北から伝播した四国の事例なども比較対象として取り上げて分析している点は、これまでのシシ踊り研究に対して新たな方向を示すものといえる。若干論証の粗い部分があり、さらなる検証の余地が残されているが、本論文で初めて指摘された知見やその独自の視角は示唆に富み、その成果は、広く関係分野の発展に大きな寄与をなすことは間違いない。

よって本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。